基礎演習　　福島 良一

授業概要

本演習は 3 年次からの専門演習に向けての「予行演習」と位置づけられる。したがって、本を読むこと、そして口頭発表の練習や質疑応答に重点が置かれることになる。

テキストは次の 2 冊を使用する。

① 佐々木雄一『近代日本外交史』

幕末の開国から太平洋戦争の敗戦に至るまでの近代日本の対外政策の展開過程を概観します。とりわけ、世界あるいは東アジアの情勢の変化と向き合いつつ、対外膨張を含めて日本はどのような対外行動をとったのかを考えていく。

② 保阪正康『戦争の近現代史』

近代日本が経験した戦争の歴史を振り返ることを通して、その教訓を学ぶとともに、現代世界が直面する戦争やテロにいかに向き合っていくべきなのかを考えていく。

授業の進め方としては、受講者各人に割り当てをした上で、担当箇所の発表をしてもらう。読書の習慣や口頭発表の作法を身につけてもらえるようキメ細かく指導する。

授業計画

第 1 回	春期の進め方の説明	第 16 回	秋期の進め方の説明
第 2 回	『近代日本外交史』の講読①	第 17 回	『戦争の近現代史』の講読①
第 3 回	『近代日本外交史』の講読②	第 18 回	『戦争の近現代史』の講読②
第 4 回	『近代日本外交史』の講読③	第 19 回	『戦争の近現代史』の講読③
第 5 回	『近代日本外交史』の講読④	第 20 回	『戦争の近現代史』の講読④
第 6 回	『近代日本外交史』の講読⑤	第 21 回	『戦争の近現代史』の講読⑤
第 7 回	『近代日本外交史』の講読⑥	第 22 回	『戦争の近現代史』の講読⑥
第 8 回	『近代日本外交史』の講読⑦	第 23 回	『戦争の近現代史』の講読⑦
第 9 回	『近代日本外交史』の講読⑧	第 24 回	『戦争の近現代史』の講読⑧
第 10 回	『近代日本外交史』の講読⑨	第 25 回	『戦争の近現代史』の講読⑨
第 11 回	『近代日本外交史』の講読⑩	第 26 回	『戦争の近現代史』の講読⑩
第 12 回	『近代日本外交史』の講読⑪	第 27 回	『戦争の近現代史』の講読⑪
第 13 回	『近代日本外交史』の講読⑫	第 28 回	『戦争の近現代史』の講読⑫
第 14 回	『近代日本外交史』の講読⑬	第 29 回	『戦争の近現代史』の講読⑬
第 15 回	春期の総括	第 30 回	秋期の総括

到達目標

- 本を読み、内容を的確に理解できる。
- レジュメ（発表資料）を作成したうえで、口頭発表を行うことができる。
- 自分の意見を述べながら、議論ができる。

履修上の注意

（1）日本史、西洋史、東洋史、思想史関係の授業科目を積極的に受講すること。
（2）演習は学生主体で行われるものなので、全出席することが前提である。無断欠席は認めない。

予習・復習

（1）テキストは毎回必ず各自事前に目を通しておく。
（2）発表に際しては、レジュメを作成する。
（3）授業で取り上げたテキストの箇所を読み返して、内容の理解を深める。

評価方法

授業に対する姿勢（発表準備や質疑応答への参加）80%、レポート 20%

テキスト

- 教科書名：近代日本外交史
- 著 者 名：佐々木雄一
- 出版社名：中公新書
- 出 版 年（ISBN）：2022 年

- 教科書名：戦争の近現代史
- 著 者 名：保坂正康
- 出版社名：幻冬舎文庫
- 出 版 年（ISBN）：2023 年

基礎演習　　牛田 あや美

授業概要

私たちは毎日、浴びるように情報を受け取る。一説では、江戸時代に生きた人の一生分の情報を私たちは毎日享受していると言われている。
本講義では日常の情報文化を見据えつつ、近代以降の歴史的事象から「現在」を繙いていく。またメディア論の基礎をふまえ、映像、ニュース、広告、などの具体的な素材から、日常における情報のあり方、私たちのメディア利用行動やリアリティ意識の変容など、「私たち」とメディアをめぐる問題を学ぶ。
　授業の終わりに、講義を聞いて自分が考えたことを小レポートとして書いてもらう。それを踏まえ、次回の授業でフィードバックを行う。その際、積極的な意見交換を行う。
学期末レポートは、講義内容に関連する参考文献を探し出し、自己の学んだことをいかしつつ、「視覚情報」の役割としてのメリット、デメリットを踏まえ記述する。

授業計画

第１回	SNS 活用方法前編	第 16 回	海外メディアからみる日本
第２回	SNS 活用方法後編	第 17 回	コロナ渦のテレビニュース
第３回	大手メディアと個人メディアの差異	第 18 回	コロナ渦の SNS
第４回	フェイクニュース	第 19 回	「映像の世紀」の「神」の声
第５回	視覚化されるメディア　瓦版から新聞へ	第 20 回	自由民権運動とメディア
第６回	挿絵の役割	第 21 回	宮武外骨の登場
第７回	人気の挿絵家たち	第 22 回	プロパガンダとは何か
第８回	新聞販売促進のための漫画	第 23 回	戦前の子ども雑誌
第９回	輸入された視覚文化	第 24 回	戦前の少年雑誌
第 10 回	日本における写真の誕生	第 25 回	戦前の少女雑誌
第 11 回	日本における映画の誕生	第 26 回	紙芝居とプロパガンダ
第 12 回	写真小説	第 27 回	広告
第 13 回	初期アニメーション前編	第 28 回	桃太郎の海鷲
第 14 回	初期アニメーション後編	第 29 回	ディズニーのプロパガンダアニメ
第 15 回	前期のまとめ	第 30 回	後期のまとめ

到達目標

・メディアリテラシーを獲得することにより、受動的立場だけでなく、能動的な立場としての「メディア」を考えることができる。
・特に「絵」を使用することの利点、逆に政治的にどのように利用されたかを理解することができる。

履修上の注意

・授業中にノートをとり、わからなかったことについては調べてくること。
・中学、高校で用いた「歴史」の教科書を下敷きとし、メディアが歴史とどのようなつながりがあるのか確認する。
※進行状況により授業内容を変更する場合がある。

予習・復習

予習：授業最後に次回の予習箇所を伝える。
復習：小レポートからの疑問や不明な点を、学期末レポートに反映していく。

評価方法

・授業中の質問に積極的に答える。
・授業後に記入する小レポートの内容を重視する。
・授業態度 20%、授業内レポート 40%、学期末レポート 40%。

テキスト

・必要に応じ、適宜指導する。

基礎演習　　熊田 和典

授業概要

この基礎演習では、イギリスの文化、風習、歴史についての知識を深めることを通して、次年度の専門演習において必要な力を総合的に養うことを目指して指導する。
春期には、イギリスの文化、風習、歴史全般について扱う。時には読んだ文章を批判的に分析してエッセイを書き、時には絵画等を鑑賞し、自分自身が感じたことをアウトプットする練習をする。
秋期には、主に、各自イギリスに関するトピックの中から関心のあるテーマをひとつ選び、それについて発表を行う。事前にプレゼンテーションの仕方を確認する。
ヨーロッパの一国の文化、風習、歴史に目を向けることによって、その分野の知識を身につけるとともに、日本とは異なった文化、風習に触れて、さらに広い視野に立って物事をとらえられる一助となれば幸いである。

授業計画

第１回	イントロダクション	第 16 回	秋期のイントロダクションと復習
第２回	イギリスについて：概論	第 17 回	プレゼンテーションの仕方
第３回	イギリスの食文化	第 18 回	アーサー王伝説
第４回	イギリスの４つの地域：概論	第 19 回	映画視聴：アーサー王関連（前半）
第５回	イギリスの４つの地域:ケルト人の地域	第 20 回	映画視聴：アーサー王関連（後半）
第６回	イギリスの宗教	第 21 回	児童文学
第７回	イギリスの階級	第 22 回	受講生の発表(1)
第８回	イギリスのスポーツ	第 23 回	受講生の発表(2)
第９回	イギリスの教育制度	第 24 回	受講生の発表(3)
第 10 回	イギリス美術：風景画の発達	第 25 回	受講生の発表(4)
第 11 回	イギリス美術：コンスタブルとターナー	第 26 回	受講生の発表(5)
第 12 回	イギリスの社会福祉制度	第 27 回	受講生の発表(6)
第 13 回	イギリスの民俗行事と風習：前半	第 28 回	予備日（未発表者のため）
第 14 回	イギリスの民俗行事と風習：後半	第 29 回	イギリスの音楽
第 15 回	春期の総まとめ	第 30 回	総まとめ

*授業の内容、進度は、ゼミ生の人数等によって若干変更されることがある。

到達目標

・イギリスの文化、風習、歴史についての総合的な基礎知識を身につけることができる。
・イギリスの文化、風習、歴史についての知識を深めることを通して、次年度の専門演習で必要となるレベルの日本語の運用力を総合的に身につけることができる。

履修上の注意

イギリスの文化、風習、歴史に興味のある人、その分野の知識をこれから身につけてみたい人であれば歓迎する。授業では日本語の総合的な力を伸ばすことを目的とし、日本語で書かれたプリントを使用するため、当然ながら英語の語学力が問われることはない。

予習・復習

日本語の運用能力を高めるために、予習として予め与えられた資料の講読、発表の準備を行い、授業後は、予習の段階で理解が及ばなかった箇所を中心にもう一度資料を読むとともに、書いた文章の不備や自分が行った発表でうまくいかなかったところを確認する。

評価方法

授業内での発表（秋期）（30%）、レポート（春期・秋期各一回）（50%）を重視し、さらに学習に対する姿勢（20%）も考慮に入れて、総合的に評価する。

テキスト

特になし。ハンドアウトを配布する。適宜、参考書を紹介する。

基礎演習　　越野 優子

授業概要

本科目では講義とゼミナール形式の２つの形で進行する。扱う作品は『伊勢物語』か『竹取物語』で、短く楽しい作品から入って古典に慣れることを目的とする。
各学期とも最初の数回は授業に関連する講義を行い後は学生の口頭発表となる。それぞれが感じた問題点について発表してもらいたい。三年次の専門演習に向けて、基礎的な発表の技法を身につけられるよう指導する。

授業計画

第１回	前期のオリエンテーション	第16回	後期のオリエンテーション
第２回	講義：伊勢物語（竹取物語）概論	第17回	講義： 伊勢物語（竹取物語）各論
第３回	講義：主人公や問題点	第18回	講義：資料の扱い方
第４回	講義：今後の課題	第19回	講義：レジュメの作成のしかたその①
第５回	講義：後続作品への影響	第20回	講義：レジュメの作成のしかたその②
第６回	講義：図書館実習	第21回	講義：古典文学のその他の作品①
第７回	参考文献の調べ方／論文の読み方	第22回	講義：古典文学のその他の作品②
第８回	口頭発表のしかた／発表資料作成方法	第23回	発表の準備/質疑応答
第９回	学生発表①	第24回	学生発表①
第10回	学生発表②	第25回	学生発表②
第11回	学生発表③	第26回	学生発表③
第12回	学生発表④	第27回	学生発表④
第13回	学生発表⑤	第28回	学生発表⑤
第14回	学生発表⑥	第29回	学生発表⑥
第15回	学生発表⑦	第30回	学生発表⑦
		第31回	秋期のまとめ・一年の総まとめ

到達目標

① について、どのように読まれてきたかどのような問題点と意義があるか理解できる。
② 情報メディアセンターを使用したりネットで検索したりして適切な資料や論文を探すことができる。
③ 分かりやすく適切な発表資料を作成し、周りにそれを効率的に発表することができる。

履修上の注意

・古典文学及びその関連科目を積極的に履修してほしい。
・無断欠席は厳禁のこと。
・ゼミという小さな社会で互いに良好な関係を保ち、お互いに成長していってほしい。
・授業の進捗状況により発表個所や内容を変更することがあることをご了承いただきたい。

予習・復習

・予習：初回の授業でも説明するが、テキストを事前によく読み、感じた問題点を書き出しておく。
・復習：授業後も疑問が消えないものはそのままにせずにもう一度テキストや資料を読み解決に向けて努力する。

評価方法

授業への参加度（２０％）・発表内容（４０％）期末レポート（４０％）によって総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。適宜資料を配布する。同時に、各々安価な古典作品を借りたり購入したりして授業に臨んでほしい。

基礎演習　　柴田 勝二

授業概要

近現代文学の短編の名作を読み、作品に対する研究・批評の方法を身につけるように指導する。作品を読み解きつつ、そこに織り込まれた時代社会に対する認識を深めながら、それがあくまでも作家の個性を通して作中に現れているメカニズムを把握させる。それとともに、作品に込められた哲学・思想的文脈も捉えていきたい。合わせて文学作品の映画化も視野に入れ、小説と映画の表現媒体としての差異についても考察したい。

授業計画

第１回	ガイダンス１　作品研究の方法	第 16 回	ガイダンス２　作家と作品の関係
第２回	志賀直哉『クローディアスの日記』を読む	第 17 回	太宰治『ヴィヨンの妻』を読む１
第３回	志賀直哉『クローディアスの日記』を読む	第 18 回	太宰治『ヴィヨンの妻』を読む２
第４回	森鴎外『阿部一族』を読む１	第 19 回	三島由紀夫『真夏の死』を読む１
第５回	森鴎外『阿部一族』を読む２	第 20 回	三島由紀夫『真夏の死』を読む２
第６回	森鴎外『阿部一族』を読む３	第 21 回	三島由紀夫『真夏の死』を読む３
第７回	芥川龍之介『芋粥』を読む１	第 22 回	川端康成『禽獣』を読む１
第８回	芥川龍之介『芋粥』を読む２	第 23 回	川端康成『禽獣』を読む２
第９回	樋口一葉『たけくらべ』を読む１	第 24 回	大江健三郎『死者の奢り』読む１
第 10 回	樋口一葉『たけくらべ』を読む２	第 25 回	大江健三郎『死者の奢り』２
第 11 回	樋口一葉『たけくらべ』を読む３	第 26 回	大江健三郎『死者の奢り』３
第 12 回	夏目漱石『坊っちゃん』を読む１	第 27 回	村上春樹『1973 年のピンボール』を読む１
第 13 回	夏目漱石『坊っちゃん』を読む２	第 28 回	村上春樹『1973 年のピンボール』を読む２
第 14 回	夏目漱石『坊っちゃん』を読む３	第 29 回	村上春樹『1973 年のピンボール』を読む３
第 15 回	夏目漱石『坊っちゃん』を読む４	第 30 回	村上春樹『1973 年のピンボール』を読む４
		第 31 回	まとめ　作品レポートの提出

到達目標

・作品を自身の眼で読み、主題や動機の在り処を捉えることができる。
・作品の背後にある時代・社会的文脈を調べ、読解に生かすことができる。
・第三者を説得する論理性のある文章を書くことができる。

履修上の注意

この授業は近代文学ゼミに所属する学生に向けて開かれる授業である。基本的に日本近代文学を対象として卒業論文を執筆予定の学生が受講されたい。

予習・復習

・発表担当者は必ず当該授業までにレジュメを準備し、つつがなく発表を行う。
・発表者以外の出席者も必ず作品を読み、発表者に質疑ができるように準備しておく。
・授業後は内容を見直し、作品への把握を深めつつ、レポート作成へつなげるようにする。

評価方法

期末レポート（40%）と作品の発表レジュメ（40%）、及び授業参加態度（20%）により評価する。

テキスト

前期のテキストは教員が配布する。後期の中編作品のテキストは学生が各自で文庫本を用意する。
・教科書名：
・著 者 名：
・出版社名：
・出 版 年（ISBN）：

基礎演習　　井上 正望

授業概要

本演習では、３年次の専門演習に向けて、口頭報告・質疑応答の練習を主に行っていくものとします。特に、前近代における天皇に焦点を当て、論文・文献や史料などの探し方、レジュメの作り方なども含めて指導します。また、天皇に関わる動画を実際に視聴し、それをもとに討論をすることで、自分の疑問や意見を持つとともに、それを適切に言語化することや、他者の意見を踏まえての自説構築の練習も行います。
天皇にあまり関心がない学生もいるかもしれませんが、現代の『日本国憲法』において、天皇・天皇制のあり方は、我々日本国民の総意に基づくと規定されています。従って天皇・皇族・天皇制の将来を決めるのは、他でもない皆さんです。決して他人事ではありません。ぜひ関心を持って取り組み、理解を深めるとともに、自分の考えを持ち、他者にきちんと伝えられる力を養いましょう。

授業計画

第１回	春期ガイダンス	第 16 回	秋期ガイダンス
第２回	史料批判について	第 17 回	「天皇」号の歴史
第３回	論文・史料の探し方	第 18 回	皇位継承儀礼
第４回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読①	第 19 回	天皇の変質
第５回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読②	第 20 回	令和の皇位継承をみる 前近代史の視点から①
第６回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読③	第 21 回	令和の皇位継承をみる 前近代史の視点から②
第７回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読④	第 22 回	令和の皇位継承をみて①
第８回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読⑤	第 23 回	令和の皇位継承をみて②
第９回	史料をみる―博物館見学	第 24 回	令和の皇位継承をみて③
第 10 回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読⑥	第 25 回	学術論文講読①
第 11 回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読⑦	第 26 回	学術論文講読②
第 12 回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読⑧	第 27 回	学術論文講読③
第 13 回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読⑨	第 28 回	学術論文講読④
第 14 回	『天皇はいかに受け継がれたか』講読⑩	第 29 回	学術論文講読⑤
第 15 回	春期まとめ	第 30 回	秋期まとめ

到達目標

・自分なりの意見を持つとともに、それを相手に適切に伝えることができる。
・他者の意見を尊重しつつ、自分の意見をまとめなおすことができる。
・古代に生まれた天皇がその後如何にして変質し存続したかを具体的に理解することができる。

履修上の注意

インターネットからの根拠不明・曖昧な情報を鵜呑みにせず、客観的根拠に基づく意見構築を行ってください。
実際の受講人数などによって、シラバスを多少変更する場合があります。
報告者は欠席・遅刻厳禁です。

予習・復習

各回の報告者は、必ず授業開始前までにレジュメを用意すること。
報告者以外も、テキストの報告に関わる部分を事前に読んでおくこと。
授業後は、質疑応答での意見や質問を踏まえてレジュメを見直し、期末レポートに繋げること。

評価方法

各回での報告・質疑応答での態度や、期末レポートで判断する。
期末レポート(40%)、報告(40%)、授業態度(20%)

テキスト

・教科書名：『天皇はいかに受け継がれたか―天皇の身体と皇位継承』
・著 者 名：歴史学研究会編・加藤陽子責任編集
・出版社名：積文堂出版
・出 版 年（ISBN）：2019

基礎演習　　伊藤 慎悟

授業概要

本演習は、心理学の見方・考え方を働かせ、専門書を読み、口頭発表の練習や討論をおこなうことを通して、学習論や心理学の方法論について理解を深められるよう指導する。春期では、心理学に関する文献を購読し、学習理論や心理学の方法論について理解を深める。秋期では、グループに分かれ、授業実践の分析や実験の追試を行う。教員志望の学生はもちろん、子どもの学びやその支援に関心のある学生や心理学の研究に興味がある学生の参加を歓迎する。

授業計画

第１回	オリエンテーション・春期担当決め	第 16 回	秋期グループ決め
第２回	ワークショップ体験	第 17 回	文献発表
第３回	Chapter1	第 18 回	
第４回	Chapter2	第 19 回	実験準備/学校参観
第５回	Chapter3	第 20 回	
第６回	Chapter4	第 21 回	
第７回	Chapter5	第 22 回	実験実施/データ整理
第８回	Chapter6	第 23 回	
第９回	Chapter7	第 24 回	
第 10 回	Chapter8	第 25 回	データ分析
第 11 回	Chapter9	第 26 回	
第 12 回	Chapter10	第 27 回	レポート作成（問題と目的）
第 13 回	Chapter11	第 28 回	レポート作成（方法・結果）
第 14 回	Chapter12	第 29 回	レポート作成（考察）
第 15 回	Chapter13	第 30 回	秋学期のまとめ

到達目標

・学習理論について、理論と実践の双方から理解を深めることができる。
・授業実践について、心理学的な視点から考えることができる。
・リサーチや文章執筆、資料作成、プレゼンテーションのスキル、質問のスキルを磨くことができる。

履修上の注意

・教員志望など、学校教育に強い関心のある学生の参加を推奨する。
・毎回の授業では、受講生全員が積極的に議論に参加すること。
・秋期に、課外に学校見学に行く可能性がある。

予習・復習

① テキストは毎回必ず各自事前に目を通しておく。
② 自分の発表については、レジュメを作成する。

評価方法

授業に対する姿勢（発表準備や質疑応答への参加）80%、レポート 20%

テキスト

・教科書名：認知心理学者が教える最適の学習法
・著 者 名：ヤナ・ワインスタイン、メーガン・スメラック、オリバー・カヴィグリオリ（著）
山田祐樹（監修）岡崎善弘（訳）
・出版社名：東京書籍
・出 版 年（ISBN）：2022 年（9784487816347）

基礎演習　　柴台 弘毅

授業概要

本演習では、文献講読や制作実践を通じて、メディア文化研究の視点から日本のポップカルチャーについて考察を深めながら、3 年次の専門演習、4 年次の卒業論文執筆に向けて基礎体力を養えるよう指導する。
春期は、現在の日本のエンタテイメント産業を概観するために輪読形式で文献を読む。この取り組みを通じて、エンタテインメント産業に関する知見を獲得するだけでなく、文章読解、プレゼンテーション、ディスカッションのための能力や技術を磨く。
秋期は、学年末の成果物として「ゼミ生による、音楽を中心としたキュレーション・メディア」を製作する。この取り組みを通じて、ポップカルチャーをメディア文化研究の対象として客観的に考察するための心構えや視点を磨く。

授業計画

第 1 回	春学期ガイダンス	第 16 回	秋学期ガイダンス
第 2 回	学生プレゼン(1)	第 17 回	企画会議(1)
第 3 回	学生プレゼン(2)	第 18 回	企画会議(2)
第 4 回	学生プレゼン(3)	第 19 回	企画書作成(1)
第 5 回	学生プレゼンの総括	第 20 回	企画書作成(2)
第 6 回	文献講読(1)興行	第 21 回	企画書プレゼン
第 7 回	文献講読(2)映画	第 22 回	制作実践(1)
第 8 回	文献講読(3)音楽	第 23 回	制作実践(2)
第 9 回	文献講読(4)出版	第 24 回	制作実践(3)
第 10 回	文献講読(5)マンガ	第 25 回	制作実践(4)
第 11 回	文献講読(6)テレビ	第 26 回	制作実践(5)
第 12 回	文献講読(7)アニメ	第 27 回	制作実践(6)
第 13 回	文献講読(8)ゲーム	第 28 回	制作実践(7)
第 14 回	文献講読(9)スポーツ	第 29 回	秋学期の総括①
第 15 回	春学期の総括	第 30 回	秋学期の総括②

到達目標

・エンタテインメント産業やポップカルチャーをメディア文化研究の対象として客観的に考察することができる。
・専門的な文章を読解し、疑問点を洗い出し、考察を深めることができる。
・説得的なプレゼンテーションを行い、ディスカッションを経て、自分なりの課題を見つけることができる。
・企画立案から成果物アウトプットまでの一連の流れを管理、遂行することができる。

履修上の注意

・無断欠席をせず、ゼミ活動へ積極的に取り組むこと。
・ゼミ活動を通じて、ゼミのメンバーや教員と「良い人間関係」を構築できるよう、常に心がけること。
・受講者数や進捗状況によって、授業計画を多少変更する可能性があることを留意しておいてください。
・メディア関係者を外部講師として招聘する予定があることを留意しておいてください。

予習・復習

・発表や報告に際しては、レジュメやスライドなどの資料を作成すること。
・報告者以外もテキストの報告に関わる部分を読み、疑問点などを明らかにしたうえで授業に参加すること。
・エンタテインメント産業やポップカルチャーの動向に常にアンテナを張り、授業内容の理解を深めること。

評価方法

・授業に対する姿勢（発表準備や質疑応答への参加）80%、レポートや成果物等の授業内提出課題 20%

テキスト

・教科書名：『エンタメビジネス全史―「IP 先進国ニッポン」の誕生と構造』
・著 者 名：中山淳雄
・出版社名：日経 BP
・出 版 年（ISBN）：2023（ISBN 978-4-296-00143-9）

基礎演習　　松浦 光

授業概要

本演習では３年次の専門演習に向けた準備をする（専門演習では４年次の卒業論文に向けた準備をする）。したがって、特定の言語現象を見定め、分析し、調べ物をすること、それを発表資料にまとめ、口頭発表をすることといった、言語研究の基礎を身につけることを目標とする。前期では、日本語の歴史的な意味・文法の変化を振り返る。そして、現代日本語学の研究を認知言語学のアプローチによって紹介する。受講者には時々それに基づく小課題＆簡単な発表を行ってもらう。また後期の発表に必要な研究方法や情報収集の仕方など指導する。後期では、受講者の発表が中心となる。

授業計画

第１回	オリエンテーション	第 16 回	前期の復習
第２回	認知言語学の基礎	第 17 回	「色」とことば
第３回	「ものの見方」と意味・文法	第 18 回	ことばのダイナミズム
第４回	カテゴリー化	第 19 回	言語の普遍性と相対性
第５回	スキーマ化	第 20 回	後期発表のチュートリアル
第６回	イメージ・スキーマ／意味のネットワーク	第 21 回	論文講読(1)
第７回	メタファー	第 22 回	論文講読(2)
第８回	メトニミー	第 23 回	論文講読(3)
第９回	概念メタファー	第 24 回	論文講読(4)
第 10 回	現代日本語の用例の収集と整理の方法	第 25 回	論文講読(5)
第 11 回	前期担当者発表(1)	第 26 回	後期担当者発表(1)
第 12 回	前期担当者発表(2)	第 27 回	後期担当者発表(2)
第 13 回	前期担当者発表(3)	第 28 回	後期担当者発表(3)
第 14 回	前期担当者発表(4)	第 29 回	後期担当者発表(4)
第 15 回	前期のまとめ	第 30 回	後期のまとめ

到達目標

・書かれた言語資料を集めて分析することができる。
・自分自身で日本語学の分野の発表の基礎的な準備をすることができる。
・自分の関心のある言語現象について理論に基づき論じることができる。

履修上の注意

「日本語の文法、日本語学（概論）、日本語学（各論）、日本語コミュニケーション、言語学、社会言語学」などの日本語学・言語学系の科目のうち少なくとも一部を既に履修しているか、並行して履修してもらいたい。特に「日本語の文法」は必須なので、未修なら並行履修する必要がある。

予習・復習

授業は、各自が発表準備を間に合わせることを前提としている。各自発表に間に合うように努力されたい。発表の順番などは臨機応変に決める。受講者の人数次第で講義の回数や発表の回数を調整する。

評価方法

発表（40 パーセント）、前期・後期レポート（40%）、その他受講態度等（２０パーセント）で評価する。

テキスト

・教科書名：『学びのエクササイズ　認知言語学』
・著 者 名：谷口一美
・出版社名：ひつじ書房
・出 版 年（ISBN）：2006 年（978-4894762824）

基礎演習　　三浦 麻美

授業概要

この基礎演習は西洋の歴史について社会の仕組みや政治の展開を踏まえつつ、人々がどのように生活し、何を考えていたのか、それが時間の流れと共にどのように変わっていったのか、宗教と統治体制に関わる事柄から考える。春期は学術書を講読し、基本的な知識と学術書の読み方を身につけると同時に、キリスト教が中世社会の形成に与えた影響を具体的に理解できるよう指導する。秋期はジェンダーや社会史といった別のアプローチについて学んだ後、各受講生が関心のある論点を選び、関連する文献を選んで発表する形式とする。これらを通じて、次年度の専門演習で必要な力をつけることを目的とする。

授業計画

第１回	イントロダクション	第 16 回	秋期のイントロダクションと復習
第２回	キリスト教の成立	第 17 回	ジェンダーとは何か
第３回	十字軍とは何か	第 18 回	ペストとジェンダー表象
第４回	プレゼンテーションの方法について	第 19 回	教育とジェンダー
第５回	『北の十字軍』プロローグ	第 20 回	科学とジェンダー
第６回	第一章　フランク帝国とキリスト教	第 21 回	福祉職とジェンダー
第７回	第二章　ヴェンデ十字軍	第 22 回	映画視聴：「薔薇の名前」（前半）
第８回	第三章　リヴォニアからエストニアへ	第 23 回	映画視聴：「薔薇の名前」（後半）
第９回	第四章　ドイツ騎士修道会	第 24 回	受講生発表
第 10 回	第五章　タンネンベルクの戦い	第 25 回	受講生発表
第 11 回	第六章　コンスタンツの論争	第 26 回	受講生発表
第 12 回	エピローグ	第 27 回	受講生発表
第 13 回	ドイツ騎士修道会研究史	第 28 回	報告予備日受講生発表
第 14 回	十字軍国家を考える	第 29 回	グローバル・ヒストリーとジェンダー
第 15 回	春期のまとめ	第 30 回	総まとめ

到達目標

・中世を中心としつつ、前後を含む幅広い時代の研究について自ら文献を読み、新しい知識を学ぶことができる。
・学んだこと、読んだものの要旨をまとめることができる。
・あるテーマについて自分の意見を持ち、それを適切に表現できるよう、課題を通じて文章の書き方やプレゼンテーションの方法を身につけることができる。

履修上の注意

・「西洋史学入門」「西洋史概説」、その他一つでも西洋に関係ある科目を履修していることが望ましいが、履修していなくても受講可能である。
・欠席、遅刻、早退の際は事前に教員に連絡し、了解を得ること。

予習・復習

・教科書または事前に渡すテキストをよく読み、わからない語句は意味を調べておく。
・テーマについて疑問点、ディスカッションしたいことを明確にして授業に臨む。
・授業の際はノートを取り、終了後はノートを見直して内容を復習する。

評価方法

授業中の発表（40%）、各学期末のレポート（40%）、受講態度（20%）を総合して評価する。

テキスト

山内進『北の十字軍―ヨーロッパの北方拡大―』講談社学術文庫、2011 年